

羽易の山

尾崎暢映

一、問題点

万葉集卷二に、「柿本朝臣人麿の妻の死りし後泣血哀慟みて作れる歌二首短歌并せたり」と題する歌の、第二長歌の後尾では

…… 吾妹子と 二人わが宿し 枕づく 孀屋の内に
昼はも うらさび暮し 夜はも 息づき明し 歎けど
も せむすべ知らに 恋ふれども 逢ふ因を無み 大
鳥の 羽易の山に わが恋ふる 妹は坐すと 人の言
へば 石根さくみて なづみ来し 吉けくもぞなき
うつせみと 念ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも
見えぬ思へば (2・210)

と歌われる。
大鳥の羽易の山の名義は、直感的にわかりやすい。このため、従来はその所在が問題とされた程度であった。しか

しこの歌を解する上では、羽易の山の名が提示された所由を考へることが必要になろう。それは、この歌では

憑めりし 兎らにはあれど 世の中を 背きし得ねば
…… 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす 隠りに
しかば 吾妹子が 形見に置ける 若児の 乞ひ泣く
毎に …… 鳥穂自物、腋挟み持ち …… 恋ふれど
も 逢ふ因を無み 大鳥の 羽易の山に わが恋ふる
妹は坐すと 人の言へば ……

というように「鳥自物」「鳥穂自物」「大鳥乃」の形で、鳥にかかわる枕詞が頻出するのはなぜかという問題ともかかわってくる。これには、鳥穂自物を「鳥穂自物」の誤写としてヲトコジモノとよむ向きがあるが、はたしてそれであるかという疑問も付随する。

第一の問題については、あとで触れたい。第二の問題で

は、「鳥穂自物」の鳥穂を「鳥徳」とした伝本はない。万葉集中にはヲトコを鳥徳と書いた例もない。万葉集全注巻二では、鳥穂を鳥徳の誤字とする説は認められてよいとし、或本歌（2・二一三）の該当箇所も「男自物」となっている。それで間違いはあるまいとするが、或本歌は詞句が同一であることを示すためというよりも、相違することを示すために出されたのである。なお云えば、万葉集の伝本では男のヲの音を写すのに鳥の字をもつてした例は見あたらないし、穂の字を徳に書き誤つた例も、トコの音を写すのに徳の字を以てした例もない。それゆえこは、武田氏的全註釈にいうように、鳥穂自物の字面を生かしてトリホジモノとよみ、鳥のついでに穂のようにしての意に、下の脇挟み持ちにかかるとするのが、まさつていよう。そのように考えてもなお苦しいが、ヲトコジモノ説よりは無理がない。

「鳥自物」「鳥穂自物」「大鳥乃」は、枕詞またはそれに準ずる詞句であろう。上代の詞章には、アサドリノ・アシタツノ・アザノスム・アザムラノ・イカルガノ・イヘツドリ・ウグヒスノのような形の、鳥にかかわる約四〇種の枕詞が見える。そのうちの三種が右の人麿の亡妻挽歌中にあらわれる。

作者はこの歌を詠むにあたって、「大鳥の」の枕詞に、他

界から靈魂をはこぶ鳥——ないしその靈魂の象徴——を觀じたと思われる。これに関連して注意されるのは、播磨國風土記、揖保郡の条に「大鳥山。鵝、此の山に栖む。故、大鳥山と号く」とあり、出雲國風土記、楯縫郡の条に、神魂の命の御子神に天の御鳥の命があるとすることである。当時このような靈鳥信仰のあつたことは、他に白鳥説話の存することや、

浜つ千鳥浜よは行かず磯伝ふ（古事記、大御葬の歌）

鳥翔なすあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知らむ（万2・一四五）

御立せし鳥をも家と住む鳥も荒びな行きそ年替るまで

（万2・一八〇）

の歌あたりを見ても、考えられる。

次に問題となるのは、「大鳥の 羽易の山」の所在である。この問題は本稿の論旨と若干関連するので、ここで触れてみよう。

万葉集には、人麿（注一）の亡妻挽歌にあらわれる羽易の山とは別に「春日なる羽易の山」（10・一八二七）の称がみえる。

「大鳥の 羽易の山」とこの山を同一視するか、別の山とするかについては、論者の意見がわかれる。一体、鳥が翼を交したような姿の山なら、どこにあるかと羽易の山と呼ばれてよいだろう。

人麿の妻の一人が三輪泊瀬の地を中心として生活したことは、ほぼ疑いがない。その点からすれば、大浜殿比古氏がいわれたように、彼女の墓のある羽易の山を山辺郡の龍王山か磯城郡の卷向山におし当てるのは、ふさわしいかもしれない。なお、亡妻挽歌の反歌に「衾道すすまひを引手の山に妹を置きて」(2・二二二)とあるその引手の山が龍王山である(大和志)ならば、その山は人麿の妻がかつて住んだところ——卷向山のふもと——に近く、羽易の山との関係もたどられよう。しかし別の見かたからすれば、人麿の妻が、「春日なる羽易の山」(10・一八二七)に葬られたと考えられなくもない。人麿やその妻の行動範囲が春日付近にまで亘りえたことは、地理的にも当時の交通事情からも十分認められるからである。

二、挽歌

ここで注意されるのは、人麿の長歌、それも挽歌には、「ぬえ鳥の」(2・一九六)、「朝鳥の」(2・一九六)、「鶏が鳴く」(2・一九九)、「去く鳥の」(2・一九九)、「鶉うらなす」(2・一九九)、「春鳥の」(2・一九九)、「鳥穂自物」(2・二二〇)、「鳥じもの」(2・二二三)、「大鳥の」(2・二二〇・二二三)のような形で、鳥にかかわる枕詞が多出することである。このほか、挽歌とまぎれる近接点をもつ

た作(1・四五、人麿)には、「坂鳥の」の枕詞もみえる。細かに見れば、人麿作中の鳥にかかわる枕詞で挽歌中のもので扱えないのは、二三九番歌の「鶉うらなす」ぐらいのものである。といつても「鶉うらなす」はいま一個所、人麿作の九九番歌にみえ、それも挽歌中の例である。けだし人麿の挽歌に鳥にかかわる枕詞が多出するのは、偶然でなからう。以上を要約すれば、この作者の作意の基底にその由ってきたるところ——霊鳥をもって魂の運搬者ないしその象徴とする伝統の観想——が遺っていたからである、ということになる。

こうした観点からも、「鳥穂自物」を「鳥穂自物」の誤写であると決めるのは躊躇される。這般の事情は延いては、「大鳥の 羽易の山」の語が挽歌中に布置される基層にあるものを考えさせる。というのは、挽歌の本質は一種の招魂歌であつたし、鎮魂歌でもあつたからである。古人にあって、靈魂は人間の内部または外部にある精力の源拠であつたからである。なお、大鳥の羽易の山というときの大鳥は、和名抄に、鶉うらは古乱の友で、和名於保止利であるとするが、コウノトリやタヅに限る必要はない。大形の霊鳥を漠然と云っていると見ればよい。

「大鳥の 羽易の山」というときの「大鳥の」は、枕詞と認められる。枕詞のなかには、「天」に冠するのを転用して

「ひさかたの都」(13・三二五二)、「黒髪」に冠するのを転用して「ぬばたまの妹」(15・三七一二)のように用いたもの、眼前にない事物を持ち出して枕詞としたもの、意味不明になった修飾句を慣用したものなどもある。しかし一般には、枕詞にはある詞句を説明し、讚美する機能があつた。進んでは、その作の内容と関連するものや、作品に文学的感味を加えるものもあらわれた。形式のなかに内容が滲透し、感情が形式をうごかすまでになつてきた。これを人麿による枕詞の使用状況についていえば、そこに対象把握のたしかさと、計画的に詞句を布置する方向とが認められる。

三、妹背の山

亡妻挽歌中に羽易の山の名が出されたのは、なにゆえか。それは、作者にとつてその山のすがたが雌雄の鳥の羽をうち交わしているかのように思い做されるにつけても、かつては亡妻との交情の濃やかさは比翼の鳥のそのようであつたのに、今では彼女の霊のありかすら知られないからではないか。作者が、羽易の山の山容に歌おうとする内容の集約・象徴を直観したからではなかつたか。「羽易」を鳥の両翼の意に解せず、雌雄の翼のうち、一羽の鳥の右翼と他の一羽の左翼との交叉の意に解すれば、当然そのような解釈になるだろう。これについては、雌雄共に目がひとつ、

翼がひとつで、いつも二羽が一体となつて飛ぶ比翼の鳥(爾雅)がいるとする中国の伝説や、陶淵明の「帰鳥」の詩に「顧_レ儔相鳴、景庇清陰」とあるなども、参考になる。顧儔相鳴の句を吉川幸次郎博士は「儔を顧みて相に鳴く」とよみ、儔は作者の妻をたとえたのだらうと言われた。万葉時代よりも後れるが、晩唐の季商隱の「無題」の詩にみえる「双飛翼」の語なども、比翼の意かと思われる。

男女の愛交を、このように鳥のそれに譬え言う事例は、万葉の歌にも多く見出される。男女はもと一体のものであるから、それは中国伝説に学んだというほどでなく、その根本はわが古代人の自然に持った観想の推移し変化したものであつたかも知れない。

羽易の語については、万葉集中に羽易の山(10・一八二七、2・二一〇、二二三)、「鴨の羽交」(1・六四)の用語例のあるのが挙げられる。

慶雲三年丙午、難波の宮に幸しし時、志貴の皇子
の作りませる御歌

葦辺ゆく鴨の羽交に霜零りて寒き夕は大和し念ほゆ
(1・六四)

この歌の作意は、思郷の情とかかわっている。斎藤茂吉氏の『万葉秀歌』で一首を「難波の地に旅して、その葦原に飛びわたる鴨の翼に、霜降るほどの寒い夜には、大和

の家郷がおもい出されてならない。鴨でも共寝をするのに
 という意も含まれている」と釈したのは、この点に注意し
 たからである。そうすれば、作者は鴨の羽易の語を通して、
 難波の水辺で見た鴨の印象とかさねあわせ、大和なる妻と
 交親した日々を暗示させているはずである。以上に見たこ
 とを整理すれば、作者の創作動機に参じたものは、一羽の
 鳥が両翼をかさねたさまであったとするよりは、雌雄の鳥
 が翼をかわしたさまであったとする方がより適切ではなか
 ろうか。しかも人麿挽歌の場合、作者の妻はすでにこの世
 の人でない。それゆえ、羽易の山の山容には、ひとしお亡
 妻への追慕・哀情をそそのものがあつたのだろう。

万葉集卷十三に、丹比の大夫が、亡くなった妻を感懐し
 た作として掲げられたものに

夕されば 葦辺に騒き 明け来れば 沖になづさふ
 鴨すらも 妻と副ひて わが尾には 霜な降りそと
 白栲の 羽さし交へて 打ち払ひ さ宿とふものを
 …… (13・三六二五)

とあるのは、人麿以後の例ながら、そのことを考えさせる
 ばかりでなく、「白栲の 羽さし交へて 打ち払ひ さ宿と
 ふものを」という言いかたは、当時このような観想の行わ
 れた俤を見せている。付けていえば、この例をもつて単な
 る一例にすぎぬということではできない。実際にはこうした

言いかたがなされていて、たまたま残つたのがこの例であ
 ったと見られるからである。万葉の記すところによれば、
 これも「古き挽歌」であつたという。

ここで心づくのは、この言いかたが

○白細の 袖さし交へて 靡き寝る わが黒髪の ま白
 髪に 成らむ極 新世に 共にあらむと 玉の緒の
 絶えじい妹と 結びてし 言は果さず …… (3・四
 八一)

○… 妹と吾 手携りて …… 夕には 床うち払ひ
 白栲の 袖さし交へて さ寝し夜や 常にありける
 …… (8・一六二九)

○… ひさかたの 天の河原に …… ま玉手の 玉
 手さし交へ あまた宿も 寝てしかも …… (8・一
 五二〇)

の詞句に見る、袖をさし交える、玉手をさし交える、とい
 う表現に似ることである。これを鳥の愛交の表現に移せば
 「白栲の 羽さし交へて」(13・三六二五)となるはずであ
 る。「さし交へて」のカへは、下二段動詞「易へ」「替へ」
 「変へ」と同根、羽易のカヒは四段動詞「替ひ」「買ひ」と
 同根で、「峽」「問」「交」はその名詞形である。このような
 事情もあるので、ハガヒの語を「羽さし交へて」の語と繋
 いで扱うのは不当ではなからう。「韓衣欄のうち交へあはね

ども」(14・三四八二)の句が「或る本」の歌に「韓衣襦のうち交ひあはなへば」となっているのを見ても、カヒ・カへの二語の内的関連は証せられる。外見交渉のない事実の間に強いて連絡をつけようとは思わないが、これについては、巻十五にみえる遣新羅使某夫妻の歌に

武庫の浦の入江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし(15・三五七八)

大船に妹乗るものにあらませば羽ぐくみもちて行かま
しものを(15・三五七九)

と歌った作のあるのが参照される。これらの歌に見えるハグクモルの語は羽につつまれるの意、ハグクムの語は羽の下にかばい育てるの意である。それは、「羽さし交へて」というに近い。なお、「山峽」の語のごときになれば、妥当感(注3)は、ある一つの山の区切られた中ほど——山あい——と解するよりも、一つの山と他の山とのあいだ・谷川と解する方にある。

「大鳥の 羽易の山」の場合は、斎藤氏の『柿本人麿評釈』篇卷七』によれば、(一)春日山左右の一峯、(二)御蓋山・若草山・高円山のいずれか一つ、(三)春日の水屋峯、(四)若草山、(五)高円山などの説があり、他に(六)御蓋・若草・高円の三山の総称とする説や、(七)春日山中の中峯・花山を称したのだろうとしながらも、中峯は南北に花山よりやや低い高さの並んだ

山を有して鳥の翼の形をなしているとする説(大井重二郎氏『万葉集大和歌枕考』)があるという。これによれば、從來羽易の山は或る一つの山のようにも、二つまたは三つの山のようにも受けとられていたことになる。しかし鴨の羽交、大鳥の羽易というときの鳥が一羽であるにせよ二羽以上であるにせよ、作者は大鳥の羽易の山の山容に寄せて妻とのかつての愛交をかえりみていることが注意される。

なお付け加える。大浜巖比古氏は、飛鳥(注4)の橘寺の東門を出て石舞台古墳の方へやや高みの裾をめぐる小みちから三輪山の方を見やつたところ、川原の宮・岡本の宮・淨見原の宮・飛鳥古京のかなたの空に三輪山が大鳥の頭部の形をなし、龍王・卷向がその両翼をなし、天がける大鳥の姿に見えた、と記している。しかし氏の「西側より見た龍王・卷向・三輪」の図面(『新万葉考』一四一頁)では、三輪山を頭部に、卷向山を頸部に、龍王山を翼部にえがいている。これによれば、観察する位置によって、大鳥の両翼には、あるいは龍王、卷向の二山が、あるいは龍王山の連嶺が比定されるらしい。そこでいま、大浜説を亡妻挽歌の発想に近づけていえば、これを龍王山の連嶺とするよりも、異なつた二山(龍王と卷向)とする方がふさわしいだろう。亡妻挽歌の場合も、作者の内部では二上山や妹背の山が人間の男女に譬えられるような、あるいは筑波の二峯が男神女

神とよばれるような心理がはたらいたと思われるからである。これを要するに、羽易の山は作者の意識裡にあつては一山の両翼でなく、相異なる二山であつたとすべきであらう。そこに作品としての緊密性が生ずるし、古代人の統一観によつて愛の感情の美的に表出された具体例を見ることもできる。

しかしなお、羽易の山のハガヒを一羽の鳥の両翼になぞらえたとする従来の見解も成りたないわけではない。それは、わが上代では男女の性を区別する意識は徹底しなかつたし、単数と複数との相違も曖昧であつた——集団を生活単位とする時代がながく続いた——からである。その点からみれば、羽易の山のハガヒを一羽の鳥の両翼とするか、雌雄の鳥の、一方の右翼と他方の左翼とするかは、判別しにくい。しかしやはり、作者の発想心理の底に潜んだ情念は、後者であつただろう。なぜなら人麿の長歌では、深い人間の生体験にねざす主題のもとに在来の発想法を整理し、意味表象・表現にも精度を加えてきているからである。さらに言えば、人麿は古い表現の型をのこしつつ内容を自由にひろげ、両者を統合する努力を怠らなかつたからである。相応に文学基盤ができ、文学動機のあらわれつつあつた時代の中心に居たのが、人麿であつたからである。当時の官人集団の意向と個人の情懐との中間を行く観のある人麿の

長歌の内意は、よくこの情勢を反映する。けだし愛情生活への作者の回想の叙述は、こうした時代の祭政的・文化史的情况に培われ、作者の方でもこれをリードしたところに生みだされたものであつた。

このように見てくれば、志貴の皇子の歌に「鴨の羽交に」(1・六四)の句のあることについては、人麿の臨死の地が鴨山(石見・大和の二説がある)であり、その妻の葬られたところが羽易の山であることも思いあわせられる。つまり「鴨の羽交に」の句は、当時おのずから一つの傾向を保ちながら男女交親の表現様式を生みだし、「鴨の羽交」のような文学語の成立をみちびいてくる心意の上の土壌のあつたことを、思わせるのである。

なお付け加える。万葉集には、「雁のつばさの」(10・二二三八)、「雁の翅を」(13・三三四五)、「鶯の羽白細に」(10・一八四〇)、「鴨ぞ翼はねきる」(9・一七四四)などの句がある。それゆえ「大鳥の 羽易の山」の姿を単に一羽の鳥の両翼のそれに見たてるのなら、大鳥のつばさの山、大鳥の羽の山でよいわけである。しかるに作者が羽易の山に哀情を寄せる手段を通して亡妻を悼んだのは、その山の姿が作者の傷心をえがくのに恰当したからであらう。また一つには、「大鳥の」の枕詞との意味的連繫を確実にしようとしたからであらう。事実の上でその山が羽易の山と呼ばれてい

たとしても、以上のように見てくれば、「大鳥の 羽易の山」の語が一首中にきわめて効果的に措定されていることが知られるのである。

注一 人麿の亡妻挽歌には、これがいかなる機会に、いかなる場で発想され詠唱されたか、その第一長歌（2・210七）にみえる亡妻と第二・第三長歌（2・210、211三）にみえる亡妻とは同一人かいなか、第二・第三長歌の亡妻も第一長歌にみえるようなしのび妻であつたか否か、三組の長歌は同時の作であつたかいなか、などの疑問をのこしている。

二 『帰林鳥語』八頁

三 峽の字も山と山との間、たにがわを意味し、カヒは山裾と山裾との交わるところをいう。しかしそのカヒとヲ（峯・岡）とは地続きのことが多いので、「谿八谷・峽八尾」（神代記）、[＊]「丘谷（神代紀）などと記されたり、峽の字をもヲ（神功紀）「大津の淨名倉の長峽」など、その例。これを住吉大社神代記では「長尾山」と書く」と読ませることがあり、ややまぎらわしい。

四 『新万葉考』所収「大鳥の羽易山」